# ちいちゃんしゃがみこまないで

うつみ宮土理

**著者略歴**

東京に生まれる。
実践女子大学英文科卒業。朝日新聞社「ディス・イズ・ジャパン」編集部入社。昭和42年、NTV〝ロンパールーム〟先生スタート。昭和45年、NTV〝ゲバゲバ90分〟スタート。昭和46年、ANB〝日本歌謡大賞〟司会。TX〝ゆく年・くる年〟司会。昭和52年、TBS〝クイズ・ダービー〟レギュラー解答者スタート。昭和55年、CX〝3時のあなた〟水曜日司会スタート。昭和56年、CX〝ハナキン・スタジオ〟司会。昭和57年、TX農林水産省提供〝うつみ宮土理の新食生活考〟NHKラジオ〝芸能ダイヤル〟金曜日司会スタート。LFラジオ〝宮土理の健康ジョッキー〟スタート。QRラジオ〝おはよう宮土理です〟QRラジオ〝青島・宮土理の花咲かジョッキー〟スタート。
昭和58年、MBS〝すてきな出会い・いい朝8時〟司会スタート。
主な執筆。
昭和57年、「うつみ宮土理ののびのびルポ」（週刊朝日）連載。「宮土理の聞いていいかしら」（サンデー毎日）連載。「素敵な生き方の演出法」（PHP研究所）。その他多数ある。

**ちいちゃん　しゃがみこまないで**

昭和58年9月6日　初版第1刷発行
昭和58年11月4日　第10刷発行

著　者　うつみ宮土理
発行者　渡邊紫郎實
発行所　株式会社フレーベル館
東京都千代田区神田小川町3－1
郵便番号　101
電話東京（292）7781（代表）
振替東京9—19640
印刷所　凸版印刷株式会社
乱丁・落丁本はおとりかえいたします。
0093—01001—7346

Printed in Japan.

この物語は、私を育ててくれた二人の母に捧げます。

もくじ

お父さんの決心　6
べそっこ　17
クビになった幼稚園　32
お花が笑った　52
ゴボウみたいな女の子　61
お母さんの八幡参り　67
踊りの先生はオトコオンナ？　76
夏祭りの日の〝デビュー〟　94
福子おばさんはお母さんのお姉さん　103

晴れ着のお母さん　122
大好きな真知子先生　131
ちょうちょの千鶴子　138
もちつきの日はみかんがボトン！　144
おはじき　154
新しい出発　162
愛って……　196
塾　207
受験勉強のおつき合い　229
卒業の日　248
あとがき　252

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

装幀・挿画　中島　潔

ちいちゃん しゃがみこまないで

# お父さんの決心

「俺たちは、家を出ることに決めたよ」

いつも無口なお父さんが、正座をすると、思いきったようにいいました。両膝にのっている二つのこぶしが震えていました。

「そうかい。わかったよ」

おじいさんは、一言そういうと、再び白い布を笛にあてて、磨きはじめました。

「その代リ、この家の財産は、長男だからといってもお前には何一つあげないからね」

おばあさんは念押しするように、同じ言葉をくリ返しました。

お父さんは、おじいさんやおばあさんの怒リは覚悟していました。勘当されてもい

い、それよりもお母さんと子どもだけのあたたかい生活をしたいと思ったのです。

お父さんに、生まれ育ったこの家を出る決心をさせたのは、最近のお母さんの様子でした。

ある朝起きると、部屋の隅で割烹着のままうずくまっているお母さんを見かけた時からです。

台所で朝ごはんの仕度をして、それから長い廊下を走るようにして子どもたちを起しに部屋にやってくると、お母さんはしばらく部屋の隅でお腹を抱くような格好でじっとかがみこんでいるのです。

――疲れているんだな。

お父さんは、お母さんの疲労がわかっていました。働きづめの毎日の生活と心労。

それは全部この家の中に住んでいることにある、とお父さんは思いました。お母さんはまるで歯車の上で休みなく廻っているはつかねずみだったのです。

おじいさんの部屋を出て、長い廊下を歩いてつき当ると、そこがお父さんや千鶴子

たちの部屋でした。ガラス戸一枚で仕切られた部屋は、親子五人が頭を並べると、いっぱいです。

お母さんが繕いものをしている明りが、廊下のつきあたりのガラス戸からもれています。

――お母さん、喜ぶだろうな。

お父さんは、お母さんが幡州酒店に嫁いできたときの若くてういういしかった花嫁姿を思い出しました。庭先の黄色い菊の花を背景に、記念写真をとりました。角隠しから、お父さんを見上げたお母さんの大きい目が幸せで輝いていました。

あれから十年が経ちました。

姑や弟家族が同居するこの大きな家の中で、お母さんの目がつらそうに曇ってきて、そしてふっくらしていた頬が、少しずつ細くなっていきました。毎日、くるくると働いて、そして千鶴子、一つ違いの弟の広和、そしてその下の伸江を産んで、お母さんは年を重ねてきました。

――長い間、苦労をかけたなぁ……。

ガラス戸のカーテンの隙間から、お母さんが千鶴子の枕元で針を動かしている姿が見えました。

――これから幸せになるんだよ。

廊下から月が見えました。手を広げたような黒い雲が、まるい月の表面を覆うように、ゆっくりと動いていました。それがお父さんには、この十年間のお母さんや子どもたちを苦しめてきたこの家の生活のように思えて、しばらく足を止めるとじっとながめていました。

千鶴子の家は屋号を「幡州酒店」といって、かなり大きな酒屋でした。

現在はそのあたりも高層建築で埋められていますが、千鶴子の育った三十余年前は、わらぶきの農家が緑にかこまれて点在していました。

付近には商店もまばらでしたから、幡州酒店は近在の客を集め、取り扱っているも



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

のには酒、醤油、味噌、塩のほかに、タバコ、菓子類、パン、缶詰などもありました。

当時は、醤油も酒も油も秤(はかり)売りでした。味噌はもちろんでした。

ガラスびん一本もおろそかにできない時代で、客はみな、あきびんを持って買いにきたものです。今のような便利なびん詰めやパック詰めの時代とは比べものにならないほどの労力が必要とされました。

ひとかかえもあるブリキの重い缶を持ち上げてお客さんのびんに注ぐのは、おもに上のおじさんの仕事でした。この、久男おじさんは千鶴子のお父さんの弟で、いずれは幡州酒店を継ぐことになっていました。

下のおじさんは光男おじさんといって、ご用聞きや配達などに回っていましたが、配達するといっても物が豊富に出回っていない頃のことですから、一日の半分は奥の座敷の上がりかまちに腰をおろして、タバコをふかしていました。

お客さんの姿を見て誰よりも早く「いらっしゃいませ」というのもお母さん、ご用をうかがうのもお母さんでした。

久男おじさんは油を計る以外は他の仕事にはあまり手を貸そうとしませんでした。ですから、お母さんの仕事がふえてしまいます。酒樽や醤油樽の栓をぬいて升にうつしたり、しゃもじで味噌をすくって秤(はかり)にかけたり、ザラメのついた大きな飴玉をかぞえて紙袋に入れたり、息つく間もないほどです。

久男おじさんと光男おじさんの奥さんたちも、店に顔を出して働いていました。でもすぐに、

「あっ、容ちゃんが泣きだした」

「あっ、家の子も泣いてるわ」

といって、子どもをあやしに二階へ駆け上がってしまいます。

奥の部屋から聞こえてくる千鶴子の弟の広和の泣き声に、お母さんが、

「すいません、ちょっとお店をお願いします」

と、ゴールデンバットをくゆらせている光男おじさんに頼むと、そばでお茶を飲んでいたおばあさんはそれを聞きつけて、低い声でいいます。

「赤ん坊ってのは、泣くのが仕事じゃないか。放っておいたら、いつか泣きやむさ。それにしてもふみさんの子どもたちはよく泣くんだねえ」

店の奥のうす暗い片隅では、金庫を横におじいさんがそろばんをはじきながら、帳簿に数字をかき入れています。屋号の幡州酒店を白く染めぬいた厚手木綿の紺の前かけが、おじいさんの仕事着でした。夕方になって部屋の中が真暗になると、白く浮かぶ前かけの文字がおじいさんの居場所を教えてくれました。

千鶴子のお父さんは東京にある造園会社に通っていました。東京とは多摩川をはさんで隔たっている幡州酒店からは、通勤時間だけでも一時間はかかりました。お父さんは毎朝早くに家を出て、夜は千鶴子がうとうとと眠りかけた頃にならないと帰ってきません。日曜日でも仕事に出ることが多いのでした。

ある晩、珍しく早く帰ってきたお父さんに、千鶴子が口をとがらせていったことがあります。

「お友だちのゆっこちゃんのお父ちゃんは毎日、六時に帰ってくるっていうよ。お父

ちゃんは、どうして早く帰ってくれないのよ」

「ちーちゃん、そんなふうにいうもんじゃありませんよ。お父さんの会社では、たくさんお花や木を植えてるでしょ。その世話でお父さんは忙しいのよ」

弟の広和の山のようなおしめをたたんでいたお母さんは、やさしくいいました。

「じゃ、日曜日は？　ゆっこちゃんのお父ちゃん、日曜はずうっとお家にいて、いっしょに遊んでくれるってさ。この間なんか、上野動物園に連れてってくれたんだって……」

お父さんは、少し困ったような顔をしました。まだ年端のゆかない、小さな娘のいい方の中にも、日頃、両親にかまってもらえないさみしさがこめられているのを、痛いほど感じるのです。

ふだんはあまり家にいないお父さんですが、千鶴子が泣き虫であることや、自分の母親が妻や娘に対してことごとにつらく当たること……、そうしたことに気がつかないお父さんではありませんでした。

また、自分自身を考えてみても、両親や弟たちからはよそよそしい目で見られ、この家で心からくつろぐことのできるのは、古井戸の周りの花の手入れをするときぐらいなものでした。

自分の家の商売がどうしても好きになれなくて、子どもの頃から興味のあった植物の世界に飛びこんでしまったお父さんは、長男の自分が跡を継がなかったことが家族をつらくさせていると知って、心を痛めていたのです。せめて、自分がこの家にいるときだけでも、妻と子をかばってやろう、とお父さんは思いました。

「さあ、ちーちゃん、おいで。父さんに抱っこだよ」

自分の気持をひきたてるように、お父さんはわざと声をはずませていいました。

「そんなに口をとがらせたら、ひょっとこみたいで、ちっともかわいくないよ。

さあ、こっちを向いて。父さんとにらめっこしよう。

ちーこちゃん　ちーこちゃん

にらめっこしましょ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com